

博士 (2015 年度)

合衆国南西部プエブロ・インディアンの 土器製作における伝統の変容

飯山 千枝子

1. 研究概要

本論文は、現合衆国南西部ニューメキシコ州およびアリゾナ州に定住するアメリカ先住民プエブロ・インディアンの土器（以後、プエブロ土器と略称）の製作を事例に、アメリカ併合から現代までの160年余を射程として、土器製作の伝統の変容を、文化的、通時的にとらえ、歴史の動態や白人社会との関連から考察した。プエブロ土器は、2000年にわたり人びとの暮らしと密接な関係をもってきたもので、南西部の風土から生まれた信条や価値観が土器の文様やその製作に表象されている。これまでプエブロ・インディアンの研究は、19世紀末の遺跡発掘調査による考古学研究に始まり、その後、人類学の観点から文化・社会的側面や気質など精神の働きにかかわる研究、また、アメリカとの関係を政治政策史の研究としてとらえたものが多く、その一方で、土器は製作方法、各時代の様式などの研究はなされたものの、土器をプエブロ・インディアンの生き方とともにとらえたものはほとんどない。

南西部地域がアメリカに組み込まれて以後、伝統の変容が著しい近現代において、プエブロ土器製作の伝統に重要な変容が起こった時期は、主に4回数えることができる。それは「1880年の鉄道開通前後」、「1900年～1930年代の土器品質改良期」、「1950年～1970年代の汎プエブロ文化創出期」、「1980年代～2000年代の現代作家誕生期」である。極言すれば、プエブロ土器は白人社会との接触、交渉関係において、各時期に、伝統の破壊、復興、固定、分化と変容しながら、その多様性を確立してきたと見て取ることができる。本論文で、プエブロ・インディアンが土器製作を駆使して新たな環境と向き合い、「滅びゆくインディアン」という社会風潮に抗して、プエブロ・アイデンティティを保持しながら、時代に適応してプエブロ文化を再構築し、多様性を活力に土器製作を発展させてきたことを明らかにした。

2. 論文の構成

第1章 前史としての先史時代、および歴史時代

アメリカ領有の近現代に入る前史として、土器製作の基盤となった先史時代と歴史時代—スペインおよびメキシコ統治時代を考察した。先史時代に、交易、農耕、儀礼が発達し、農耕が社会生活の基盤になると、降雨や豊穡の祈りを表象する文様が土器に描かれるようになり、現在に至る伝統が形成されていった。スペイン統治時代に、先住民文化は激しい弾圧を受け、人びとは土器製作を入植者の日用食器や教会用具に特化させる一方で、隠れて儀式を行い、ひそかに伝統的土器製作を続けた。土器製作の継続性は、1300年代から1838年まで定住されたペコス・プエブロを事例に、考古学者アルフレッド・キダーに依拠して例証した。メキシコ統治時代は自由な時代であり、先史時代のアナサジ文様を取り入れた伝統的な土器が広く製作された。先史時代から歴史時代の終わりまで、人びとが土器製作の伝統を自在に変容させ、白人の政治的・宗教的弾圧を切り抜けてきたことを考察した。

第2章 交易商人の台頭—インディアン・キュリオの通信販売ビジネス —1870年代～1910年代—

第2章から第7章は、19世紀末から現在までの近現代を対象にしている。まず第2章では、19世紀末に台頭した交易商人とインディアン・キュリオを取り上げ、プエブロ土器を含めたインディアンの手工芸品が、インディアン・キュリオとして東部都市に通信販売された実態を、通信販売カタログを年代順に比較検討することで明らかにした。白人交易商人が、先住民の手工芸品の製作や販売に深く関与していることを示し、20世紀初頭の東部社会におけるインディアン趣味の大流行やアーツ・アンド・クラフツ運動とキュリオとの関係を分析した。アーツ・アンド・クラフツ運動の影響を強く受けたアメリカン・アートのなかで、手工芸品のコピーや「インディアン性」の盗用という問題も起きたが、インディアン・キュリオは、大衆に広範に受け入れられていたことを確認した。そして、高品質な伝統土器がアート教育の見本となり、ホビのナンペコの土器が博覧会に出展されるなど、カタログ販売されたキュリオが、インディアン・アートに目を向けさせる契機となったことを明らかにした。

第3章 鉄道開通と南西部観光の開発・定着 —1880年代～1930年代—

1880年に鉄道が南西部に開通して、サンタフェに観光が導入され開発されていく過程を検討し、プエブロ社会の経済的環境が激変するなかで、土器の作り手たちが、土器の商品化と小型化を図り、白人がインディアンに抱くイメージを逆手にとって、白人好みのみやげ土器の製作に積極的に取り組んだことを明らかにした。同時に、みやげ土器の生産の陰で、伝統的土器も製作されていることを示し、こうした土器製作の二面性は、ミシェル・ド・セルトーが「戦術」と呼んだ民衆の「もののやり方」、すなわち弱者ゆえの臨機応変の実践と言えるのではないかと考察した。19世紀末から20世紀にかけて始まった南西部観光の導入は、先住民文化の発信と手工芸品の販売によるプエブロの人びとの経済的支援を目標とした白人学者グループと、南西部旅行を誘致して収益を上げようとするサンタフェ鉄道とハーヴェイ社のビジネスグループによって進められたことを提示した。その結果として、「芸術の町サンタフェ」が誕生し、サンタフェは南西部観光の中心的役割を担っていく。南西部の観光開発が、プエブロの土器製作における伝統の変容を引き起こし、土器の性格を大きく変えたことを確認すると同時に、観光客が土器販売の新しい大きな市場となったことを明らかにした。土器の作り手たちが、押し寄せる観光客や白人文化に適應して、土器製作の伝統を変容させつつ、新たな観光時代を漸次切り抜けていったことを提示した。

第4章 土器の品質改良運動—「サンイルデフォンソ・プロジェクト」 —1900年代～1930年代—

前章で言及したみやげ土器生産の影響を受け、質の低下がみられたプエブロ土器を復興させようとする、白人主導の土器品質改良運動「サンイルデフォンソ・プロジェクト」を取り上げた。プロジェクトを主導した考古学者エドガー・ヒューエットと美術家ケネス・チャプマン二人の古代土器への傾倒から、古典的な質のよい伝統的土器の製作が奨励され、「真正性」が重要視されたことで土器の質の向上が見られたが、結果として、土器製作の方向が固定されていったことを検討した。プロジェクトの最終過程で、サンイルデフォンソのマリア・マルティネスと夫フリアンが「黒地黒彩様式」を発明し、マリアの自作品へのサインとともに、プエブロの伝統的慣習を破った新しい伝統が付け加えられたことを明

らかにした。さらに、現在のサンタフェ・インディアン・マーケットに継承される第1回のマーケットが、1922年にニューメキシコ博物館の館長でもあったヒューエットにより創出されたことを、ニューメキシコ博物館の機関誌 El Palacio に依拠して提示した。1900年代から1930年代の土器品質改良期の製作伝統は、プロジェクトの強い影響や真正性を標榜する新しいマーケットの要求を受けて、古典を手本とする伝統的土器への回帰という変容を見せたことを確認した。

第5章 汎プエブロ文化の創出 —1950年代～1970年代—

1950年代から1970年代のアメリカの公民権運動とインディアンの復権運動を視野に、土器製作の伝統を含めたプエブロ社会の文化的アイデンティティの構築に着目した。まず、前章で言及した品質改良運動の成果として、プエブロ全体で上質な伝統的土器が復興し、1950年代には優れた規範的土器製作者が輩出して、伝統的プエブロ土器製作の隆盛に寄与したことを提示した。プエブロ土器製作の伝統の変容は、古代様式を引き継ぐ保守的な傾向にあったが、土器は1970年代にかけ、より洗練された精巧な美術工芸品となり、プエブロ・インディアンの伝統文化を表すものとしてプエブロ全体のトレードマークになっていったことを確認した。1964年に、コチティのヘレン・コルデロが発明した塑像型土器「ストーリーテラー」は、各プエブロに急激に広まり、その製作を通して汎プエブロ文化が形成されていったことを、阿部珠理が論じた伝統の広域化と汎インディアン文化への融合の事例であるパウワウに依拠して考察した。汎プエブロ文化形成の要因は、ストーリーテラーを製作することによって、口承というプエブロ文化の深い基盤にある伝統に参加することが出来たからであり、プエブロの人びとが共通して持つ「語ること」の意義と精神性をストーリーテラーは象徴し、人びとの紐帯を強めて汎プエブロ文化が創出されたと分析した。

第6章 革新的土器製作への動き—現代土器作家誕生 —1980年代～1990年代—

1980年代から1990年代の革新的土器製作への動きを追い、土器製作者たちを革新への先駆者、現代的伝統派、現代的革新派に分けるチャールズ・キングに依拠して、それぞれの作品を検討し、それらに製作者の経験の広がりや問題意識、美意識や造形表現の願望などの内発的要因が強いこと、ギャラリーの支援やサンタフェのアート環境が影響していることを明らかにした。さらにプエブロ社会とアーティストの関係を、エドウィン・ウェードの論文を引用しつつ、革新的土器製作に対するプエブロの人びとの反応を提示し、プエブロの伝統や価値観、慣習が革新的なアーティストの縛りになっていることを論じた。また1962年に設立されたアメリカン・インディアン・アーツ研究所 (IAIA) を取り上げ、徹底した自己表現が求められるアート教育を検討し、IAIAの白人によるアート観や現代絵画表現に対して、プエブロのアーティストが激しく反感を抱いたことに言及した。しかし、IAIA陶芸科のプエブロ・インディアンの学生たちは、ホピの陶芸彫刻家オテリー・ロロマの指導を受け、革新的土器製作に取り組んでいったことを例示した。プエブロ文化や信条を体現するというプエブロ社会の要請を充足させることが、伝統的土器の意義であるならば、現代作家は、自身の芸術的意義と充足を求めて作品を製作し始めたのであり、伝統的土器の保守的な製作への反動をも含むような複合的要因が、土器製作の伝統の変容を促したことを考察した。

第7章 現代プエブロ土器の多様性—変容からの視点 —2000年代—

現代プエブロ土器製作における多様性に着目した。革新的陶芸家の作品を分析し、革新的土器の対抗軸としての伝統的土器を、伝統の継続という視点から考察した。前者では、伝統的な土器の機能を消滅させ、デザインや技巧に重点を置くことで新たな表現力を得た作品や、プエブロの自然観や儀礼のシンボル、歴史の文脈の掘り起しが試みられている。他方、後者には、プエブロ社会に根付く実用土器への愛着や伝統の継続の要請があることを明らかにし、さらに、伝統的土器の販売に大きな影響力を持つサンタフェ観光について、サンタフェ市のランディ・ランドル観光局長へのインタビューを提示して、インディアンやその文化がサンタフェ観光の目玉として位置づけられていることを確認した。続いて、現代作家への聞き取り調査を、プエブロ内に居住する伝統的土器作家と、プエブロ内外の革新的作家の二つのグループに分けて提示し、プエブロ社会への帰属意識や伝統意識を論じた。そこから分かることは、革新的作家も伝統的作家も、全員のなかに文化に根差した伝統意識が認められたこと、革新的作家が外部社会との交渉関係のなかで、内発的に外部の材料や新しい技法を積極的に取り入れ、伝統の革新と常に新しい自己表現を試みている一方で、伝統的作家は、最初の聞き取り調査から20年近く経たにもかかわらず、製作信条や製作方法は伝統に則って揺らぐことなく継続されており、強い帰属意識が個人的表現を上回っていることを明らかにした。2000年代における土器製作の伝統の変容は、個人の芸術性の追求や造形表現の欲求が突出したものであり、プエブロ土器の多様性は、ますます複雑に広がりながら、古代の器とも繋がりを持ち、土器のデザインは先史時代までを包含する。土器製作を豊かにし、プエブロ社会や文化の原動力となっていくものが、プエブロ土器の多様性にあり、それに伴う伝統の変容・生成にあることを論じた。

終章

第1章から第7章までの内容を振り返り、その上で、現在のプエブロ土器が、実用に耐えるものから、みやげの小品、民芸的なもの、伝統的なもの、芸術のための芸術作品まで、多種多様になっていることを確認した。土器製作の伝統には、古くは自由で広大な交易や、スペイン、アメリカによる政治的、軍事的、文化的弾圧や奪取、それらに対応する土器製作の二面的試みや観光客の取り込みなど、無数の交渉や駆け引きの重層的で多面的な複合性が存在する。一見、白人の関与のままに動いてきたように見える作り手も、その白人の意向をくみつつ、工夫し、白人学者をはじめ観光客が求める真正性や本質主義を逆手にとる形で、自分たちのアイデンティティの表出である土器製作を行ってきたことを確認し、土器製作の豊かさは、先史時代の伝統的土器から革新的現代土器までに広がるプエブロ土器の多様性にあることを評価した。プエブロの人びとが、プエブロ社会を取り巻く歴史の動態の中で文化を再構築し、あるいは伝統を生成しつつ、しなやかに辛抱強く、かつ臨機応変に土器を作って生き抜き、その一連の生き方によりプエブロ土器製作の伝統は大きく変容してきたと結論した。